



大岡越前の墓所

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

猛 烈な暑さが続く夏となったが、八月の半ばになつて幾らか和らいだ。この時期にしては珍しく散歩にはとてもいい日和なので、JR香川駅をおりて、ぶらぶらと歩きはじめる。ちなみに駅名は香川だが、ここは四国ではなく神奈川県茅ヶ崎市であり、茅ヶ崎駅から相模線に乗って二つ目だ。この駅から歩いて一五分ほどのところに、日本酒の蔵元が経営するレストランがあり、ときどき食べに来ているのだが、その近くに大岡越前の墓所があることを知った。

蔵元レストランへの角を通りすぎ、その次を曲がって住宅街をぬけると、両側を畑に囲まれたのどかな道となった。子供のころ、夏休みで遊びにいった田舎の風景のようだ。大岡家の菩提寺である浄見寺は、そのような場所にある。

大岡家の墓所には、初代の忠勝から十三代の忠綱までが眠っており、有名な大岡越前守忠相は五代目にあたる。テレビドラマ『大岡越前』は、江戸町奉行である大岡越前の機知と人情に溢れた「大岡裁き」によって人気を博した。しかし、これはあくまでもフィクションであり、実際の大岡は裁判官というよりも、八代將軍徳川吉宗とともに「享保の改革」を推進した政策官僚として真価を発揮した。

大岡が大いに注力した政策の一つに、江戸の防災都市化がある。江戸は何度も大火に襲われた火災都市だった。特にその八〇%が冬場に発生し、その時期には郊外に避難するものも現れ、人口が一人余りも減るといふありさまだった。そこで、大岡は三つの手段で防火対策に取り組んだ。すなわち、火除け地を設ける区画整理を行うこと。町火消を創設すること。そして、火の粉によって延焼しやすい茅葺や杉皮葺の屋根を廃止し、瓦葺きや土蔵造りなど耐火建築への改築を推し進めることだった。

この中で耐火建築への改築を見ると、大岡と町人とのやり取りがおもしろい。まず大岡は、「瓦葺きにしてもいいんだよ。遠慮するな。勝手次第」といった自主性を重んじたような通達をする。しかし、町名主たちは、「たびたびの火災で町は困窮しているから無理ですわ」と消極的だ。

「じゃあ、土を三センチほどの厚みで屋根に塗るのはどうだ？ それでも火の粉は防げるよ。楽勝だろう？」と大岡は切り返す。するとまたまた、「はあ!? 土だけ塗っても雨のとき普通に流されるし。ちよーウケんですけどww」ととんでやる気はない。「おのれ! お前らのために考えているのに、ゆるせん!」。けっきょく期限付きで瓦葺き、土蔵造り

への改築を命じる始末となった。けっこう横暴に思えるが、それでも改築を課した町には税金を免除したり、無利子で金を貸すなど配慮したのは面目躍如といったところか。

しかし、このように進めた耐火建築化も、吉宗が亡くなると廃れてしまい、江戸が本格的な不燃化都市となるのは明治の世を迎え、東京と名を変えてからのことだった。



大岡越前守忠相の墓
戒名は松運院興誉仁山崇義大居士

[交通] JR香川駅より徒歩約30分
浄見寺境内(大岡家墓所の拝観料は200円)